大分県柔道競技の現状に関する研究
—少年柔道競技者および保護者に着目して—

阿部　淳　岩本貴光　阿部剣征

【要　旨】
大分県の少年柔道競技者および保護者に対してアンケート調査を実施し、今後の大分県における柔道競技普及発展の材料とすべく、柔道競技に対するイメージや、柔道への取り組み方などに対する意識を調査検討した。

【キーワード】
柔道、少年柔道、柔道の意識調査、大分県柔道

Ⅰ．問題提起と研究目的

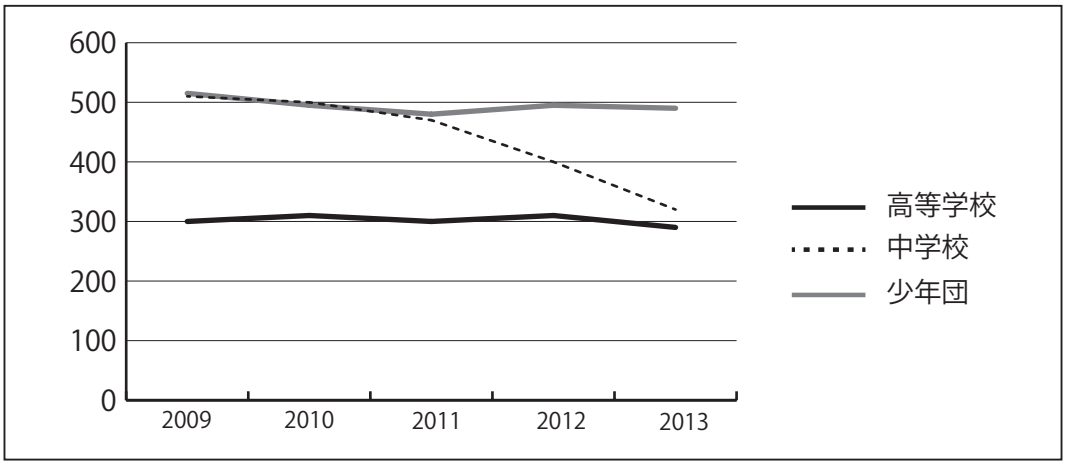
現在全日本柔道連盟では、次世代に向けて、諸問題に対する改革に取り組んでいる。しかしその中で、変えてはならないものとして、嘉納治五郎師範が終生取り組まれた柔道の教育的側面がある[7]。それは「人間形成の道」であり、心身の鍛錬を通して、「己を完成し社会に貢献する」人を作る[5]ということにつながり、それなくして今後の柔道の発展を考えることはできない。教育に関する具体的な取り組みとしては、柔道ＭＡＩＮＤプロジェクト特別委員会において各県柔道連盟や中学校体育連盟・高等学校体育連盟との連携を図りつつ、柔道の精神を広く普及する活動を展開している。

大分県では、たとえば、大会会場の美化運動に取り組み、ゴミの持ち帰りなどを訴え、競技者だけでなく、応援に来ている保護者にも柔道の教育活動の意味を理解してもらう為の活動を行っている。また全国的には、教育をする側である指導者の資質向上を図る為、指導者養成特別委員会において公認指導者資格制度を設けて、講習の受講を義務づけている。ところが、このような取り組みを実施しつつも、大分県では、その教育を受ける側である少年柔道競技者において、高校生や少年団には変化はないものの、中学生に限ると 2011 年から緩やかながらその競技人口が減少傾向にある（図１）。しかし同様の傾向は、野瀬ら[3]の研究によれば大分県に限ったことではなく、全国的な傾向とされる。ここに柔道の教育の点で、少年柔道競技者をめぐるひとつの大きな問題があると言える。このような現状を踏まえて、現在実際に柔道に取り組んでいる少年柔道競技者がどのような問題意識を持っているか、またその保護者は少年達の柔道への取り組みを見て、どのように感じているかなどを探ることは、少年柔道競技者を増やす為の具体的な教育に対して、さらに今後の柔道普及発展に欠かすことのできないものと考える。

本研究では大分県の柔道競技に注目し、少年柔道競技者および保護者を考察対象に据えて、独

自に作成したアンケートを用いて彼らの意識調査を行い、それらを分析することで、大分県における少年柔道の現状や問題点を明らかにすることを研究の目的とする。それによって今後の柔道普及発展活動の一助としたい。

図１．大分県柔道連盟登録者数



Ⅱ．調査の概要

Ⅱ－１　調査対象

今回の調査では、調査対象に少年柔道競技者（以下、少年と略記）と保護者を据え、独自に作成したアンケートに答えてもらい、後日それを集計して、その内容を分析するという経過で進めた。具体的に少年には、これから中学校に進学する小学校５年生と６年生を対象に据えた。また調査対象に少年の保護者を加えている。それによって、彼らの柔道を始めるきっかけや、柔道競技の捉え方に対する保護者の関わり方が、明確になると推察されるからである。

Ⅱ－２　アンケートの項目

今回実施するアンケートについてだが、少年の柔道競技への取り組みに対する問題意識や、それに対する保護者の考えを抽出する為に、独自の項目を立てたアンケートを作成した。その際に以下の５つの柱をたて、それに沿って項目を設定した。第一に、本人と柔道に関する情報を得る為に、性別、学年、柔道の経験年数、経験した大会の四項目を設定した。さらに保護者の情報として、性別、年齢、続柄、柔道の経験年数、柔道実績の五項目を設定した〔表１〕。第二に、柔道の開始状況と継続意志を知る為に、始めた年齢、始めたきっかけ、始めるのに適した時期、いつまで続けたいのか、の四項目を設定した。また保護者には、子供に対する立場からも同様に、お子さんが柔道を始めた年齢、お子さんが柔道を始めたきっかけ、お子さんが柔道を始めるのに適した時期、いつまで柔道を続けてほしいかの四項目を設定している〔表２〕。その際に柔道を始めたきっかけ（保護者）には、複数回答を求めた。第三に、柔道への期待、柔道の魅力を明らかにする為に、柔道によって身につけたいこと、身についたこと、良いイメージ、柔道の好きなところの四項目を設定した。また保護者にも、身につけてほしいこと、身についたこと、良いイメージの三項目を設定した〔表３〕。すべての項目に対して複数回答ができるようにした。第四に、柔道の問題点を抽出する為に、始める時の問題点、続ける上での問題点、悪いイメージ、嫌いな

ところ、の四項目を設定した。保護者には、始める時の問題点、続ける上での問題点、悪いイメージの三項目を設定した〔表４〕。すべての項目に対し複数回答を可能とした。第五に、少年にとっての柔道の現状を明らかにする為に、柔道が好きか嫌いか、指導法をどう思うか、指導が合っている理由、指導が合っていない理由、試合は必要だと思うか、試合回数、他のスポーツの有無、の七項目を設定した。保護者には、試合は必要だと思うか、試合回数、他のスポーツの有無、の三項目を設定した〔表５〕。そして少年に対しては指導が合っている理由、指導が合っていない理由、他のスポーツの有無の三項目に、保護者には他のスポーツの有無の一項目には、複数回答を求めた。

以上の結果、アンケート項目は少年に対して 23 問、保護者に対して 18 問の設定となり、その形式は答えやすいようにマークシート方式とした。

Ⅱ - ３　調査実施方法

調査は平成 26 年７月 27 日（日）に実施した。その日には中津市総合体育館で、第 10 回大分県整骨旗争奪少年柔道大会が開催された為、まとまった人数を確保できるからである。具体的な調査対象となったのは、同大会に参加した小学校５、６年生の 94 名の少年と、大会に応援で来場していると思われた保護者 251 名となった。

実際に調査を行うにあたり、まず事前に大会パンフレットから該当する学年の競技者数を調べてチームごとにまとめ、大会に参加していた少年全体の人数を保護者分として同じくチームごとにまとめた。次に大会直前に行われる監督会議で各監督に対して調査の実施について説明した上で、アンケート用紙を配布し、大会中に少年および保護者に記入してもらい、同日の大会終了までに回収した。

Ⅲ．調査結果および考察

Ⅲ - １　アンケートの回収

アンケートの回収は、少年 94 名への配布に対して 65 名分、保護者 251 名への配布に対して 167 名分を数え、回収率は 67.2％となった。これらアンケートから得られた各項目のデータおよび、その分析は次のようになる。

Ⅲ - ２　本人情報〔表１〕

まず少年本人についてだが、性別内訳は男子が 50 名（76.9％）、女子が 15 名（23.1％）で、男子がおおよそ女子の３倍を数えた。学年は５年生が 35 名、６年生が 30 名と、学年に大きな差はなかった。経験年数は「３年以上 10 年未満」の少年が約 75％（49 名）と一番多く、しっかりと稽古を積んで試合に出場している一方、４名（6.2％）が１年未満で出場していた。今までに経験した大会では、九州・全国大会出場経験を持つ少年が 26 名（40％）であり、県大会出場者を合わせると 80％の少年がある程度大きな大会を経験していることが分かった。

つぎに保護者について、性別内訳は男性 49 名（29.3％）、女性 117 名（70.1％）、無記入１名で、ほぼ全体の２／３が女性であった。年齢は、30 代と 40 代が、合わせて 148 名（88.6％）と全体の９割近くを占めた。それに一致するかたちで、少年との関係では、「父」が約 30％、「母」が約 60％、「祖父母」が約７％を数えた。保護者の柔道経験年数は「未経験」が１番多く、118 名（約 70％）であり、次に「20 年以上」で 11 名（6.6％）であった。保護者の柔道経験者は１年未満も含めて 49 名（約 30％）となり予想より少なかった。これは一人の出場選手（少年）に対して、

一人の保護者に回答を求めたことと、約７割が母親・祖父母が回答していることを考えると、実際には柔道経験者がもう少し多いことが推察される。今後の質問方法に工夫が必要である。大会への出場経験を持つ保護者は42名（約25%）を数え、さらに大会経験のレベルで最も多い回答が県大会出場で18名（10.8%）となり、全国大会の経験者は14名（8.4%）、そして国際大会の出場者には３名（1.8%）となり、保護者も大きな大会を経験しており、そのレベルも高いことが伺える。

表１　本人情報

少年

性別

	人数	%
男子	50	76.9
女子	15	23.1
不明	0	0.0
計	65	100.0

学年

	人数	%
５年生	35	53.8
６年生	30	46.2
不明	0	0.0
計	65	100.0

経験年数

	人数	%
１年未満	4	6.2
１年以上３年未満	12	18.5
３年以上６年未満	27	41.5
６年以上10年未満	22	33.8
10年以上	0	0.0
不明	0	0.0
計	65	100.0

保護者

性別

	人数	%
男	49	29.3
女	117	70.1
不明	1	0.6
計	167	100.0

年齢

	人数	%
20代以下	9	5.4
30代	80	47.9
40代	68	40.7
50代	4	2.4
60代	3	1.8
70代以上	0	0.0
不明	3	1.8
計	167	100.0

続柄

	人数	%
父	50	29.9
母	99	59.3
祖父	8	4.8
祖母	4	2.4
その他	3	1.8
不明	3	1.8
計	167	100.0

経験年数

	人数	%
未経験	118	70.7
１年未満	7	4.2
１年以上３年未満	8	4.8
３年以上６年未満	8	4.8
６年以上10年未満	7	4.2
10年以上20年未満	8	4.8
20年以上	11	6.6
不明	0	0.0
計	167	100.0

経験した大会

	人数	%
未経験	3	4.6
市町村大会	10	15.4
県大会	26	40.0
九州大会	18	27.7
全国大会	8	12.3
不明	0	0.0
計	65	100.0

柔道実績

	人数	%
未経験	121	72.5
市町村大会出場	7	4.2
県大会出場	18	10.8
全国大会出場	14	8.4
国際大会出場	3	1.8
不明	4	2.4
計	167	100.0

Ⅲ - 3　柔道の開始状況と継続意志〔表２〕

Ⅲ - 3- 1　柔道の開始に適した時期と実際に始めた時期

まず、柔道を始めるのに適した時期を聞く質問では、少年および保護者ともに「小学校低学年」と回答した者が一番多く、少年は 61.5%（40 名）、保護者は 63.5%（106 名）で、２番目も少年および保護者ともに「幼稚園以下」と回答したもので、少年は 27.8%（18 名）、保護者は 21.6%（36 名）であった。これに対して実際に始めた年齢を聞く質問では、少年は「６歳以下」が 49.2%（32 名）続いて「７歳」18.5%（12 名）。保護者では「６歳以下」が 61.1%（102 名）続いて「７歳」18.6%（31 名）という結果であった。つまり少年と保護者のどちらも 85%以上が幼稚園から小学校低学年にかけて柔道を始めることが良いと思い、実際に 67%以上が小学校１年生以下から始めていると言いかえることができる。これらのことからは、少年では少しでも早く柔道の技術に接したほうが、身につける機会が増えると感じ、保護者では幼いうちから柔道を始めたほうが精神的な成長を期待できると感じていることが推察される。

Ⅲ - 3- 2　柔道を始めたきっかけ

柔道を始めたきっかけについての質問では、少年は「家族がやっていた」「周囲の勧め」「知り合いの勧め」など周囲の人の影響で始めている者が約 75%、保護者においても「家族の勧め」「知り合いの勧め」「先生の勧め」などの周囲の人の影響で始めている者が約 70%であった。これは、岡田ら[1)]が日本とフランス青少年の実態調査において日本人は男女とも「知人の勧め」と回答した者が有意に多く、日本に特徴的な結果と見なした点と類似した。また「近くに道場があった」という物理的な理由は、少年では 7.7%保護者では 6.9%にとどまり、「漫画・インターネット」と回答した者は少年および保護者とも全く見られなかった。

これらの結果から指摘できるのは、柔道開始のきっかけでは、約 75% が周囲の人の影響によることである。このことから、道場関係者のみならず保護者との協力のもと、新たな対策を考え、人材の確保に当たる必要があるといえる。また情報化社会の現代において、インターネットによる回答が全くなかったことは、意外な結果となった。そこで改めて関連するホームページを検索すると、全日本柔道連盟のホームページ[8)]上には、大分県の道場はわずか２つの団体しか出てこなかった。しかし大分県柔道連盟のそれ[9)]では、道場紹介に 36 団体すべてが紹介されている。ここには関係者の努力が見て取れるが、しかしすべての団体が紹介されているものの、実際にホームページを見た者がすぐに道場に参加できるような地図や練習時間の記載、あるいは興味が持てるような、練習状況を写した写真を掲載した事例は、残念ながら半数ほどであった（平成 26 年８月現在）。このことから、おそらくアンケートで該当がなかったという結果は、少年および保

護者がインターネットに関心が無いということではなく、ホームページが、彼らには関心を持つようなインパクトがなかったと判断せざるをえないだろう。それゆえ、大分県柔道連盟では、さらに各団体それぞれが情報化社会に目を向け、インターネット等の情報を、少年および保護者が関心を持つよう整備することにより、新たに柔道人口を増やしていく機会が確保できるであろうことが推察される。

Ⅲ - 3 - 3　柔道の継続意志

柔道をいつまで続けたいか（保護者にはいつまで続けてほしいか）という質問には、少年では「一生涯」が一番多く 33.8%（22 名）であったのに対して、「小学校卒業まで」と「中学校卒業まで」を合わせると 32.3%（21 名）という結果であった。保護者では少年と同じく「一生涯続けてほしい」という回答が一番多く 32.9%（55 名）、次いで「中学校卒業まで」が 19.2%（32 名）、３番目に「小学校卒業まで」と「高校卒業まで」が 15%（25 名）で並んでいる。これらの結果からは、今後の柔道人口を増やしていくには、この 50%弱の少年および保護者に柔道の魅力をどう伝えるかが課題であることが伺える。

表２　柔道の開始状況と継続意志

少年

始めるのに適した時期

	度数	相対度数(%)
1　幼稚園以下	18	27.8
2　小学校低学年	40	61.5
3　小学校高学年	5	7.7
4　中学生	0	0.0
5　高校生以上	0	0.0
6　その他	1	1.5
不明	1	1.5
計	65	100.0

始めた年齢

	人数	%
６歳以下	32	49.2
７歳	12	18.5
９歳	11	16.9
８歳	5	7.7
10歳	4	6.2
11歳以上	1	1.5
不明	0	0.0
計	65	100.0

保護者

始めるのに適した時期

	度数	相対度数(%)
幼稚園以下	36	21.6
小学校低学年	106	63.5
小学校高学年	14	8.4
中学生	1	0.6
高校生以上	0	0.0
その他	2	1.2
分からない	7	4.2
不明	1	0.6
計	167	100.0

お子さんが柔道を始めた歳

	人数	%
６歳以下	102	61.1
７歳	31	18.6
８歳	12	7.2
９歳	12	7.2
10歳	5	3.0
11歳以上	2	1.2
不明	3	1.8
計	167	100.0

始めたきっかけ

	人数	%
周囲の勧め	10	15.4
家族がやっていた	25	38.5
知り合いの勧め	14	21.5
楽しそう	3	4.6
漫画･インターネット	0	0.0
近くに柔道場があったので	5	7.7
かっこいい	2	3.1
伝統文化なので	0	0.0
その他	5	7.7
不明	1	1.5
計	65	100.0

お子さんが柔道を始めたきっかけ＜複数回答可＞

	人数	%
家族の勧め	74	44.3
知り合いの勧め	44	26.3
その他	20	11.9
体を強くしたい	19	11.3
先生の勧め	15	8.9
近くに柔道場があったので	13	7.7
かっこいい	3	1.7
伝統文化なので	1	0.5
漫画･インターネット	0	0
不明	0	0
計	189	112.6

いつまで続けたいか

	人数	%
小学校卒業	11	16.9
中学校卒業	10	15.4
高校卒業	6	9.2
大学卒業	3	4.6
生きている間	22	33.8
分からない	12	18.5
不明	1	1.5
計	65	100.0

いつまで続けてほしいか

	人数	%
小学校卒業	25	15.0
中学校卒業	32	19.2
高校卒業	25	15.0
大学卒業	7	4.2
一生涯	55	32.9
その他	21	12.6
不明	2	1.2
計	167	100.0

Ⅲ - 4　柔道に期待すること、魅力〔表３〕

Ⅲ - 4 - 1 柔道に期待するところ

柔道で身につけたいことに関する質問では、少年で、「技術・体力」52.3%（34 名）、「あいさつ」43%（28 名）、「きつくても頑張ること」30.7%（20 名）の順であった。保護者では「礼儀」89.2%（149 名）「体力」61%（102 名）、「仲間と仲良くする」40.1%（67 名）の順であった。また柔道を通して身についたことに関する質問では、少年で、「あいさつ」52.3%（34 名）、「技術・体力」46.1%（30 名）、「きつくても頑張ること」35.3%（23 名）の順であった。保護者では「体力」69.4%（116 名）、「礼儀」50.2%（84 名）、「精神力」37.1%（62 名）の順であった。

こうした結果からは、柔道に期待することが、少年では「技術・体力」を身につけたいという傾向が強く、保護者では圧倒的に「礼儀」を身につけさせたいという思いがある。そして実際に身についたことでは、少年では「あいさつ」が一番目で次に「技術・体力」、保護者では「体力」が一番目で次に「礼儀」という結果であった。これは、保護者の思いに合わせて、少年はまず礼儀に関係する「あいさつ」を身につけ、その上で少年の望む「技術・体力」が身についていると理解できる。いずれにせよ、少年および保護者が身につけたいと強く希望する礼儀や体力が、柔道を通してある程度身についているものと推察される。

Ⅲ - 4 - 2　柔道の魅力

少年に柔道の好きなところを聞く質問では、「技が決まった時」が一番多く 61.5%（40 名）で

あり、次に「先生に褒められる」33.8%（22名）、「試合で勝つこと」「友達が増えた」が同じ32.3%（21名）の順であった。

柔道の良いイメージを聞く質問では、少年および保護者ともに「礼儀正しい」〈少年58.4%（38名）、保護者74.2%（124名）〉が一番多く、次に少年では「かっこいい」40%（26名）、「力強い」32.3%（21名）の順であり、保護者では「力強い」42.5%（71名）、「日本の伝統文化」35.9%（60名）の順であった。つまり、これら結果からは、少年にとって柔道に最も好感を持つのは、指導者から褒められる面や、友達を増やす面もあるものの、最も重視されたのが、柔道の技を決めるという、柔道の一番の醍醐味を求めていたことが分かった。その一方で、柔道のもう一つの特徴である礼節を重んじる面に、少年および保護者ともに注目していたことも把握できた。

表３　柔道に期待すること、魅力

少年

身につけたいこと《複数回答可》

	人数	%
技術・体力	34	52.3
あいさつ	28	43.0
きつくても頑張ること	20	30.7
試合に勝つこと	15	23.0
友だちを増やす	7	10.7
分からない	4	6.1
毎日を充実させる	2	3.0
伝統文化に触れる	0	0.0
ない	1	1.5
不明	0	0.0
計	111	170.3

身についたこと《複数回答可》

	人数	%
あいさつ	34	52.3
技術・体力	30	46.1
きつくても頑張ること	23	35.3
友だちが増えた	22	33.8
試合に勝つこと	12	18.4
分からない	4	6.1
毎日が充実している	3	4.6
ない	1	1.5
伝統文化に触れる	1	1.5
不明	0	0.0
計	130	199.6

保護者

身につけてほしいこと《複数回答可》

	人数	%
礼儀	149	89.2
体力	102	6.1
仲間と仲良くすること	67	40.1
柔道の精神	55	32.9
柔道の技術	37	22.1
リーダーシップ	12	7.1
試合に勝つこと	10	5.9
その他	7	4.1
伝統文化に触れる	6	3.5
不明	0	0
計	445	265.9

身についたこと《複数回答可》

	人数	%
体力	116	69.4
礼儀	84	50.2
精神力	62	37.1
仲間と仲良くできること	53	31.7
技術	18	10.7
柔道の精神	14	8.3
試合に勝つこと	12	7.1
その他	10	5.9
リーダーシップ	10	5.9
不明	1	0.5
計	380	226.8

良いイメージ《複数回答可》

	人数	%
礼儀正しい	38	58.4
かっこいい	26	40.0
力強い	21	32.3
日本の伝統文化	7	10.7
安全	4	6.1
ない	2	3.0
清潔	2	3.0
美しい	1	1.5
その他	1	1.5
不明	0	0.0
計	102	156.5

良いイメージ《複数回答可》

	人数	%
礼儀正しい	124	74.2
力強い	71	42.5
日本の伝統文化	60	35.9
かっこいい	30	17.9
美しい	7	4.1
ない	3	1.7
その他	3	1.7
安全	1	0.5
清潔	0	0
不明	1	0.5
計	300	179

柔道の好きなところ《複数回答可》

	人数	%
技が決まった時	40	61.5
先生に褒められる	22	33.8
試合で勝つこと	21	32.3
友達が増えた	21	32.3
家族に褒められる	14	21.5
試合に出ること	11	16.9
練習が楽しい	11	16.9
ない	1	1.5
その他	1	1.5
不明	0	0.0
計	142	218.2

Ⅲ - 5　柔道の問題点〔表４〕

柔道を始める時の問題点に関する質問では、少年では「問題がない」が 76.9%（50 名）であった。柔道を続ける上での問題点に関する質問では「問題がない」が 58.4%（38 名）で、次いで「勉強との両立」が 20%（13 名）という結果であった。

保護者では、柔道を始める時の問題点の質問に「問題がない」が 50.2%（84 名）で、次いで「その他」が 14.9%（25 名）、３番目に「勉強が大変」が 9.5%（16 名）で、柔道を続ける上での問題点に関する質問では「問題がない」が 36.5%（61 名）、次に「勉強との両立」30.5%（51 名）であった。

柔道の悪いイメージに関する質問では、少年および保護者とも一番目に「危険」が挙がり、その割合は、少年が 35.3%（23 名）で、保護者が 42.5%（71 名）であった。

柔道の嫌いなところを少年だけに質問した結果は、一番目に「ない」47.6%（31 名）で、次に「暑い・寒い」と「うまくできない」が 18.4%（12 名）で並んでいた。

こうした結果からは、柔道の問題点では、柔道を続ける上で、20 ～ 30%の少年および保護者が、「勉強との両立」に問題意識を持っていることが分かる。つまり柔道をすることによって、学習環境を奪ってはいけないし、勉強することの大切さを、柔道を通して学ばせることが求められていると言える。そうした現状を改善する為には、今後の各団体運営において、柔道の技術を教え

ることと共に、「勉強との両立」という問題に取り組む必要があろう。

また柔道の悪いイメージでは、少年および保護者ともに「危険」なことが一番多くなった。向井[2)]は「少年指導では、ケガをしない体づくりを第一に考え、その上で、基礎体力、運動能力を高める為のトレーニングを工夫する必要がある」と述べている。本来柔道において、体を守る為の受身や体力をつける為のトレーニングが重要視されている。しかし、昨今の暴力的指導問題や、誤った指導により重度の障害を負ってしまう事例、また不慮の事故も実際に起こってしまっている。それらを踏まえて、安全指導や事故ゼロを目指した公認指導者資格制度に対して、各県での協力と取り組みの充実を図り、地方での柔道の普及発展に関わる末端の指導者まで安全指導が行き渡ることが、このイメージを払拭する第一歩であると考える。

表４　柔道の問題点

少年

始める時の問題点《複数回答可》

	人数	%
ない	50	76.9
勉強が大変	5	7.6
先生がこわい	3	4.6
その他	4	6.1
試合の問題(勝てない･少ない等)	2	3.0
仲間が少ない	2	3.0
道場の問題(遠い･狭い等)	1	1.5
お金がかかる	1	1.5
柔道が難しい	1	1.5
不明	0	0.0
計	69	105.7

続ける上での問題点《複数回答可》

	人数	%
ない	38	58.4
勉強との両立	13	20.0
試合の問題(勝てない･少ない等)	5	7.6
その他	4	6.1
道場の問題(遠い･狭い等)	3	4.6
お金がかかる	2	3.0
柔道が面白くない	2	3.0
先生がこわい	2	3.0
仲間が少ない	2	3.0
不明	0	0.0
計	71	108.7

保護者

始める時の問題点《複数回答可》

	人数	%
ない	84	50.2
その他	25	14.9
勉強が大変	16	9.5
仲間が少ない	14	8.3
試合の問題(勝てない･少ない等)	13	7.7
柔道が難しい	13	7.7
道場の問題(遠い･狭い等)	13	7.7
お金がかかる	10	5.9
先生がこわい	3	1.7
不明	0	0
計	191	113.6

続ける上での問題点《複数回答可》

	人数	%
ない	61	36.5
勉強との両立	51	30.5
仲間が少ない	22	13.1
試合の問題(勝てない･少ない等)	19	11.3
お金がかかる	15	8.9
道場の問題(遠い･狭い等)	13	7.7
柔道が面白くない	12	7.1
柔道が難しい	11	6.5
先生がこわい	2	1.1
不明	1	0.5
計	207	123.2

悪いイメージ《複数回答可》

	人数	%
危険	23	35.3
ない	19	29.2
きつい	18	27.6
人気がない	7	10.7
汚い・臭い	2	3.0
こわい	3	4.6
お金がかかる	2	3.0
マナーがわるい	2	3.0
その他	1	1.5
不明	0	0.0
計	77	117.9

悪いイメージ《複数回答可》

	人数	%
危険	71	42.5
きつい	37	22.1
ない	35	20.9
人気がない	32	19.1
汚い・臭い	19	11.3
マナーが悪い	11	6.5
お金がかかる	8	4.7
その他	7	4.1
乱暴	4	2.3
不明	0	0
計	224	133.5

嫌いなところ《複数回答可》

	人数	%
ない	31	47.6
暑い・寒い	12	18.4
うまくできない	12	18.4
きつい	11	16.9
試合に勝てない	7	10.7
怒られる	6	9.2
その他	1	1.5
臭い	0	0.0
仲間ができない	0	0.0
不明	0	0.0
計	80	122.7

Ⅲ - 6　現在の状況〔表５〕

少年に柔道が好きか嫌いかを聞く質問では､｢好き｣が 73.8%（48 名)､｢嫌い｣が 3.1%（２名)、｢分からない｣23.1%（15 名）であった。指導法が自分に合っているかを聞く質問には 58.5%（38 名）が｢合っている｣と答え､｢合っていない｣という回答は 4.6%（３名）であった。しかし｢分からない｣が 36.9%（24 名）と高い数値であった。｢合っている｣と回答した 38 名にその理由を聞く質問には｢技術をしっかりと教えてくれる｣が一番目で 42.1%（16 名）、次に｢厳しいが自分のためになる｣が 26.3%（10 名)、｢精神をしっかりと教えてくれる｣｢ほめてくれる｣が同じ 23.6%（９名）であった。試合が必要だと思うかの質問には少年の 92.3%（60 名)、保護者の 93.4%（156 名）が｢思う｣と回答している。

試合の回数に関する質問では､少年で｢多い｣が 30.8%（20 名)､｢少ない｣が 21.5%（14 名)、｢どちらともいえない｣が 46.2%（30 名)、保護者では｢多い｣が 13.2%（22 名)、｢少ない｣が 22.2%（37 名)、｢どちらともいえない｣が 64.7%（108 名）という結果であった。

他のスポーツをしているかという質問には、少年で 83%（54 名)、保護者で 67.6%（113 名）が｢していない｣と回答した。これは岡田ら[1]の調査で日本人女子の約 95%が柔道以外のスポーツを実施していないという結果と類似していた。また、他のスポーツをしている中で一番多いのは、少年および保護者ともに水泳であった。

このように、現在の状況として、少年の73.8％が柔道を好きなスポーツとして理解していた。指導者との関係では、およそ全体の２／３が指導者の指導が「合っている」と認識している。とはいえ、一方で、「分からない」とする回答も36.9％に及び、指導内容が曖昧なままでも柔道を好意的に感じている場合が想定される。今後は、やはりそうした少年たちが指導者との信頼関係を実感した上で、柔道に関わるようにすることも課題の一つと言える。

他のスポーツ活動において、少年は83％（54名）が、また保護者の回答でも67.6％（113名）が、他のスポーツをせずに、柔道だけに打ち込んでいることが分かった。ただし保護者の回答から30％強の者が他競技も行っていることは、見逃すことのできない問題をはらんでいると言える。というのは、そうした保護者の行動を踏まえるならば、今後、中学へ進学する際などに、どちらかの競技への選択に迫られる可能性が考えられるからである。そのことからも、保護者にも、他のスポーツにはない柔道の魅力を、きちんと伝達していく必要性も見えてくる。

試合に関しては少年および保護者ともに、圧倒的に必要だと考えている。しかし、その回数に関しては、両者ともに多いとも少ないとも答えていない回答が60％強を示す為、試合をどの程度実施するのが適切なのかは分かっていない状況が把握される。昨今では様々な大会が開催され、少年の試合数が増加し、保護者への負担が大きくなっているのではないかと感じていたが、今回の結果からはそのような回答は得られなかった。試合を通して学べることは勝ち負けや闘争心だけではなく、相手への尊敬や思いやりの気持ち、また緊張にどう立ち向かうかという自分自身の精神的な成長などがあり、そのような効果に期待する保護者は少なくはないのだと推察される。課題は、少年および保護者にとってどの程度の試合回数を行うべきか、ということである。現状では、少年では「多い」と回答した者が３割強に対して、「少ない」と回答した者が２割強のため、どちらかというと、「多い」と感じ、保護者では「多い」と回答した者が１割強に対して、「少ない」と回答した者が２割強のため、どちらかというと、「少ない」と感じている。勉強をおろそかにせず、柔道に取り組む上で、最適な練習方法とともに、その成果を試す試合の回数を今後、考える必要があろう。

表５　現在の状況

少年

柔道が好きか嫌いか

	人数	%
好き	48	73.8
嫌い	2	3.1
分からない	15	23.1
不明	0	0.0
計	65	100.0

指導法をどう思うか

	人数	%
自分に合っている	38	58.5
自分に合っていない	3	4.6
分からない	24	36.9
不明	0	0.0
計	65	100.0

指導が合っている理由《複数回答可》

	人数	%
やさしい	2	5.2
ほめてくれる	9	23.6
厳しいが自分のためになる	10	26.3
技術をしっかりと教えてくれる	16	42.1
精神をしっかりと教えてくれる	9	23.6
練習内容がちょうどいい	7	18.4
練習時間がちょうどいい	8	21.0
その他	1	2.6
不明	1	2.6
計	63	165.4

指導が合っていない理由《複数回答可》

	人数	%
厳しい	1	33.3
易しくて自分のためにならない	0	0.0
怒られる	1	33.3
たたかれる	1	33.3
技術がわからない	0	0.0
心構えがわからない	0	0.0
練習内容がきつい・易しい	1	33.3
練習時間が長い・短い	0	0.0
その他	2	66.6
不明	0	0.0
計	6	199.8

少年

試合は必要だと思うか

	人数	%
思う	60	92.3
思わない	1	1.5
分からない	4	6.2
不明	0	0.0
計	65	100.0

試合回数

	人数	%
多い	20	30.8
少ない	14	21.5
どちらともいえない	30	46.2
不明	1	1.5
計	65	100.0

他のスポーツ《複数回答可》

	人数	%
していない	54	83.0
水泳	5	7.6
サッカー	3	4.6
その他	2	3.0
野球(ソフトボール)	1	1.5
ハンドボール	1	1.5
テニス	0	0.0
ダンス系	0	0.0
剣道	0	0.0
不明	0	0.0
計	66	101.2

保護者

試合は必要だと思うか

	人数	%
思う	156	93.4
思わない	2	1.2
分からない	7	4.2
不明	2	1.2
計	167	100.0

試合回数

	人数	%
多い	22	13.2
少ない	37	22.2
どちらともいえない	108	64.7
不明	0	0.0
計	167	100.0

他のスポーツ《複数回答可》

	人数	%
していない	113	67.6
水泳	19	11.3
その他	15	8.9
サッカー	9	5.3
野球(ソフトボール)	6	3.5
テニス	3	1.7
ダンス系	2	1.1
ハンドボール	2	1.1
剣道	0	0
不明	0	0
計	169	100.5

Ⅳ．おわりに

近年行われている全日本柔道連盟の改革を受けて、大分県での少年柔道競技者とその保護者に着目して、独自に作成したアンケートを用いて、彼らの意識調査を実施した。それらを分析して得られた結果は、以下の通りとなる。

本人情報から、一部の例外を除いてしっかりと稽古を積んで試合に出場し、約８割の少年がある程度大きな大会を経験していることが伺えた。

柔道の開始状況と継続意志から、開始状況は、少年および保護者共に幼少期から始めることが良いと思う傾向が強く、実際に幼少期から始めている者が多い傾向にあった。柔道を始めたきっかけでは、周囲の人の影響で始める傾向にあった。継続意志では、少年および保護者ともに、一生涯続けたい、もしくは続けてほしいと思う傾向が強かった。

柔道に期待すること、魅力から、期待することは、少年および保護者ともに、礼儀正しさを学び、体力をつけることを期待していることが伺えた。柔道の魅力では、保護者では少年を礼儀正しく育てる手段として柔道に魅力を感じ、少年では保護者の期待に沿って礼儀を学びながらも、柔道の技が決まった時に一番の魅力を感じていることが伺えた。

柔道の問題点から、少年および保護者共におおよそ問題がないと感じているものの、柔道を続ける上で勉強との両立に不安を抱いている者が少なくない。また悪いイメージとして危険だという考えが一番多かった。

現在の状況から、少年で、おおむね好意的に柔道に取り組んでいる。試合に関しては少年および保護者ともに圧倒的に必要だと考え、試合数はどの程度が適正なのかが把握できていない様子が伺える。また約７割の者が他のスポーツを行わずに柔道に打ち込んでいることが分かった。

これらを踏まえて、今後の大分県における柔道普及発展活動の指標として活用していきたいと思う。

謝辞

本研究を進めるにあたり、アンケート調査にご協会いただいた大分県柔道整復師会会長　加藤和信様と、第10回大分県整骨旗争奪少年柔道大会の運営に携わられた皆様、そして大会に参加された少年とその保護者の皆様に、心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

１）岡田弘隆、青柳領、中村勇、南条充寿、林弘典「フランスと日本の青少年柔道練習者の実態と意識調査」『武道学研究』33－（１） 2000年 31－39ページ
２）向井幹博『役に立つ少年柔道指導法』日本武道館 2012年
３）野瀬英豪、野瀬清喜、板垣耕太、金丸雄介
「少年柔道の指導法及び普及に関する実践的研究」－「さいたまKIDS柔道」を通して－
『埼玉大学紀要』教育学部57（１） 2008年 39－50ページ
４）野瀬英豪、野瀬清喜「少年柔道における教育的意義および普及に関する考察」
『白鷗大学教育学部論集』４－（１）2010年　315－332ページ
５）全日本柔道連盟　『柔道の基本指導』第一版　2012年
６）日本武道館『日本の武道』2007年
７）全日本柔道連盟『まいんど』第１号　2014年
８）全日本柔道連盟　http://www. judo. or. jp/（2014年８月31日確認）

9）大分県柔道連盟　http://www. oita-judo. com/（2014年８月31日確認）